

第IV章 第13・15号地点

1 調査の経過

A 調査の概要 (Fig. 1・61)

丘陵東側

上人ヶ平遺跡や市坂瓦窯跡などのある京都府木津町側の丘陵と鹿川を挟んで西側に対峙する奈良山丘陵東端に第13・15号地点は位置する。そのうち、第13号地点と第15号地点に古墳の残存が確認された。それぞれ奈良山第13号地点古墳、奈良山第15号地点古墳と呼ぶこととする。ただし、第13号地点古墳については後述するように墳丘は残っておらず、埴輪列からの推定であるため、古墳ではなく特殊な遺構である可能性も残っている。

両遺跡とも水田の広がる面から1段上がったところにあり、海拔もほぼ同様である。1段上がると地形はしばらく緩やかな傾斜が続くが、標高53m付近から背後の丘陵が急に上がって80m以上にまで向かう。なお、両地点のほぼ中間の標高68m付近の傾斜地にも古墳状地形が読み取れるが、調査はされていない。立地から見ておそらく7世紀に下る古墳であろう。

両地点のうち、第15号地点は昭和39年度の土取りの際に、Fig. 64-1～4の須恵器が出土しており、古墳の存在が前もって知られていた地点である。1972年度にはこれら両地点の調査は平行して進められたが、第13号地点については1978年度に再度追加調査をおこなった。

第15号地点

1972年度は、まず、第15号地点から調査に着手し、はじめに墳丘の南半について調査をおこない、主体部の残存の有無を確かめた。その後、周溝確認のために幅1.5mの長いトレントを西と南へ設定した。さらに、墳丘の築成方法を知るために、墳丘の北半にも幅1mのトレントを設定し、地山と盛土を層位的に調べた。調査面積は60m²である。

第13号地点

第13号地点は、古墳時代の遺物よりむしろ中世以後の各時代の土器が表土から多く出土したことから調査をおこなうことになった。はじめに南北トレントを長く設定し、それに直交する短いトレントを3本設けた。南北トレントを第1トレント、東西のトレントを南から第2、第3、第4トレントと呼ぶことにする。遺物は表土の下からはほとんど出土しなくなり、下層では古代の小穴や土坑が見つかったにすぎないが、その後、第1トレントを北に拡張したところ、円筒埴輪列が2列みつかった。そこで、その延長部分を確かめるべく、東西にトレントを拡張したが（第5トレント）、最初に検出した以上には遺構をほとんど確認できなかった。

1978年度には第1トレントの3m東に平行して幅4m、長さ36mの第6トレントをあけた。これは既にみつけていた埴輪列の北側にある落ちが周溝にあたり、墳丘本体は埴輪列の南にあることを予測したからである。それ以外に、第6トレントの東に幅3m、長さ9mと10mのトレントを2本設けて埴輪列と古墳の遺構の確認を試みた。しかし、埴輪列の遺存状態も悪く、古墳の痕跡も確認できなかった。調査面積は1972年度が125m²、1978年度が200m²である。

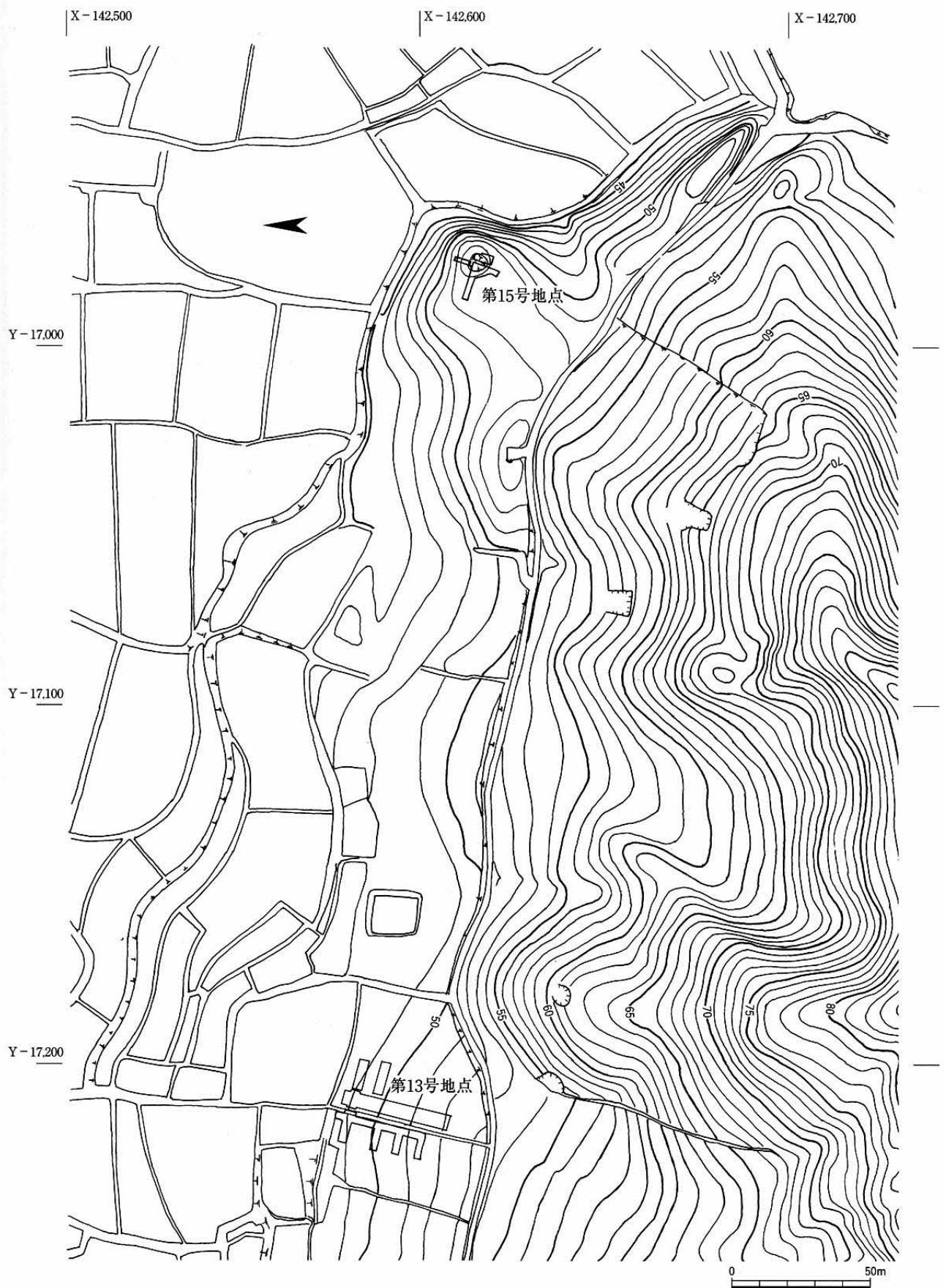


Fig. 61 第13・15号地点付近地形図 1:2000

B 調査日誌

1972年9月25日（月）

バイパス西の古墳、調査開始（第15号地点）。墳丘の九割は土取りのため削平されており、かろうじて北側墳裾部が60cm程度残る。南半について調査をおこなう。まず鰐1点がほぼ完形で出土。また、墳丘西側の周溝付近では表土中より鉄斧1点が出土した。その他、埴輪片10数点、土師器高杯の脚部片2点などがある。

9月26日（火）

昨日の調査で主体部が残存しないことが判明した。周溝検出のためトレンチを南と西に拡張。深さ約20cm、幅約1mの周溝とみるべき遺構を検出できた。鉄釘1点が出土。明日の写真撮影の準備をし、午前中で作業を終了した。

午後からは、さらに西にある遺物散布地の調査にかかる（第13号地点）。はじめに芋畑の表土に散布する遺物を採集。南北トレンチ（第1トレンチ）を設定し、さらに東西方向のトレンチを3本設定。南から北にトレンチ番号をふる。

表土下では遺物はほとんど出土しなくなる。

9月27日（水）

午前中は第15号地点の写真撮影を、午後は13号地点の調査をおこなう。表土下に、遺物を含まない黄色砂質土の層が現われ、その下に黒っぽい暗黄色土層がある。表土からは、鍔釜・摺鉢・灯明皿風の小形皿など出土。

9月28日（木）

第2トレンチで浅い土坑状遺構を検出。遺物は須恵器蓋（平安初め頃か？）が出土したのみ。第3トレンチでは穴を1基検出、遺物なし。第1トレンチは、黄色砂質土、暗黄色砂質土の下でバラスの層が出る。部長より、トレンチを北の端まで延ばす提案があり、交渉することになった。

9月29日（金）

トレンチを北に拡張する。拡張した部分の北端から3m程の位置に、東西に並ぶ円筒埴輪列を検出。埴輪は2列に並んでおり、北側3本、南側5本が残存していた。さらにトレンチを西側にも延ばす。

1979年1月13日～1月26日

第13号地点200m²追加調査

2 第15号地点の調査

A 古墳の立地 (Fig. 61)

奈良山丘陵の東端は、鹿川による開析によってL字形に削り残された形で平野部に張り出している。そのもっとも東寄りのところから約100m西に丘陵がわずかに北東へ張り出したところがある。古墳はまさにその上の突端に位置し、北と東の2面に加えて西側も丘陵が内側へ入り込んでいることによって、周囲から際立って見える格好になっている。

自然地形
を
利
用

このように自然地形を大きく利用して造られた古墳であることがわかるが、背面側の地形の改変については、標高52mの等高線によって囲われた平坦面がしばらく続くように、調査前の測量ではまったくわからなくなっていた。古墳の載る丘陵は北側の水田面から比高数mある。

調査前にすでに墳丘の大半が土取りにより失われており、北西端にわずかにものとの墳丘を残す箇所が確認できそうなところがあったにすぎない。その範囲では等高線は円形を描いており、径10m前後の円墳と推定された。

なお、昭和39年度に土取りをした際、当地点からFig. 64の1～4の須恵器が出土したとされるが、正確な位置はわからない。

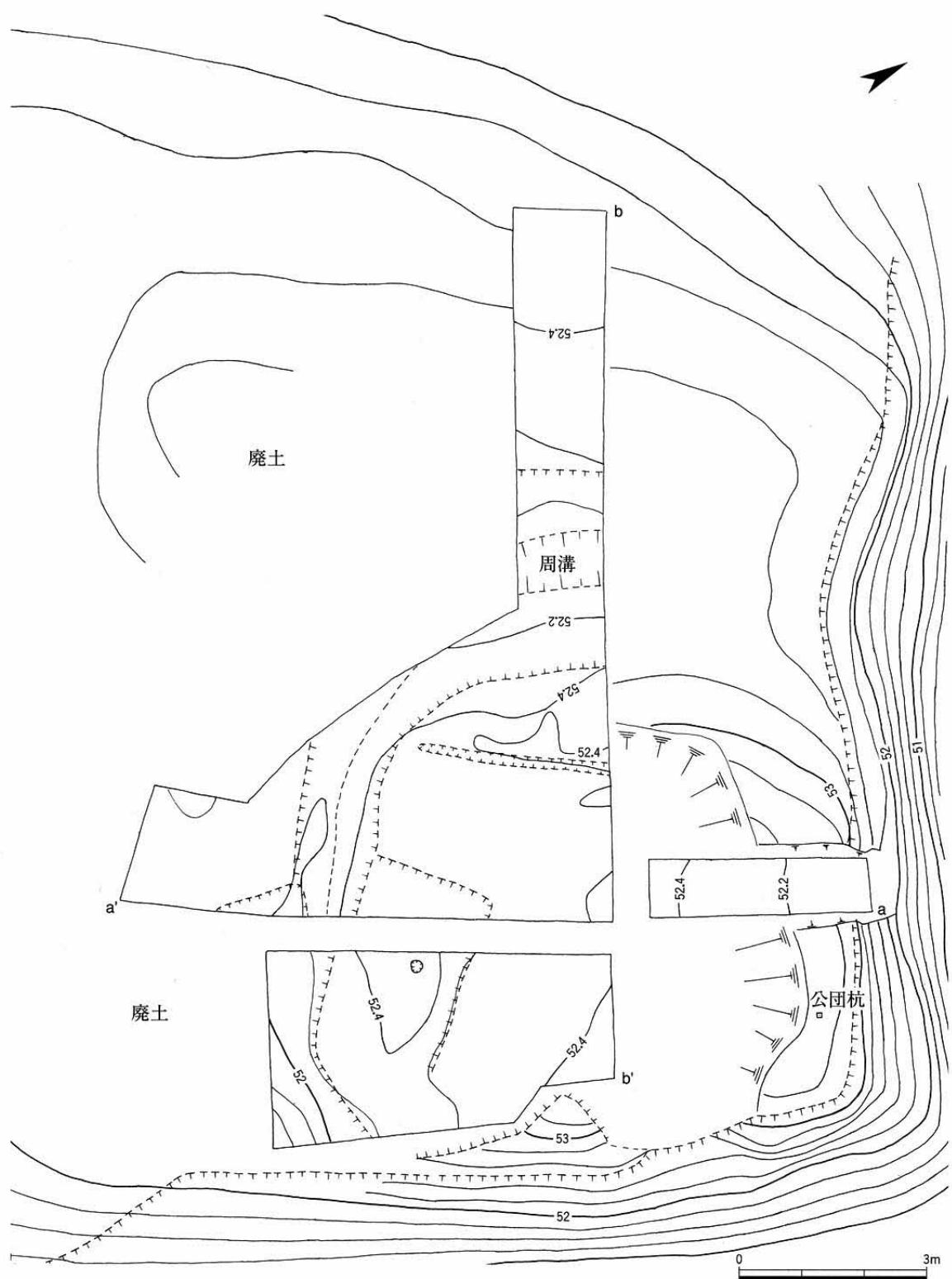


Fig. 62 第15号地点古墳 検出遺構 1:100

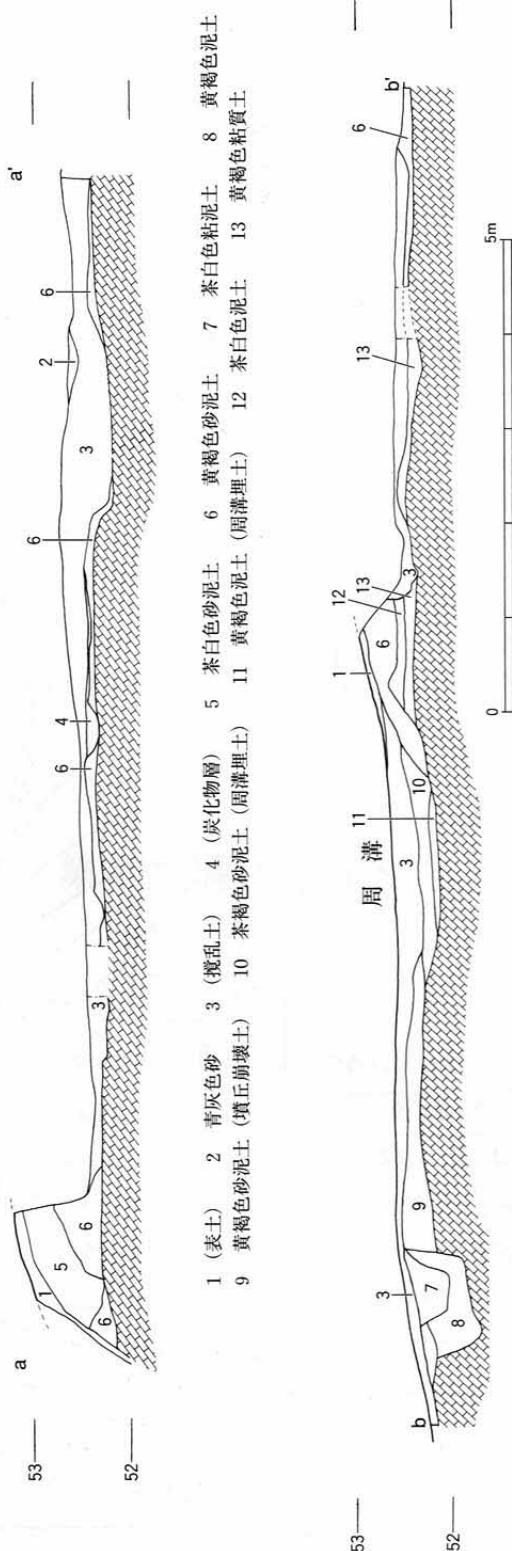


Fig. 63 第15号地点古墳 墳丘断面図 1:80

B 遺構 (Fig. 62・63,

PL. 39)

調査の結果、古墳に関する顕著な遺構は周溝だけであった。西側の細長いトレンチでは幅約3mで深さ約0.2mの周溝埋土がからうじて確認された。この周溝は南側ではさらに痕跡的になり、周溝埋土は残っていない。それでも攪乱が深く入り込んだ部分がもとの周溝であったところと思われる。なお、西に長く延ばしたトレンチの西端で墳丘崩壊土を切る新しい時期の遺構を見つけている。

墳丘は旧地表を削平して、13層の黄褐色粘質土や12層の茶白色泥土を積んでいる。盛土がもっとも残っているところは墳丘の北東部で、高さにして1mほどであった。盛土でもっとも厚く残っているのが6層の黄褐色砂泥土で、周溝の外側にも一定の厚さで同じ土質の土が堆積しているのは大きく動かされたことを示す。北東部にあるのが墳丘残存部であろう。

残存墳丘から推定される主体部の位置には大きな攪乱が入っており、明確な遺構は何一つ残っていないかった。ただし、想定墳丘の中心付近で表土中から鐵 (Fig. 64-5) を1点検出した。

墳丘の表土から円筒埴輪が十数片、土師器の高杯の破片が出土しており、西側周溝に近い表土から鐵斧1点を採取した。また、鐵釘もこの周溝部分で出土した。どれも原位置にない。

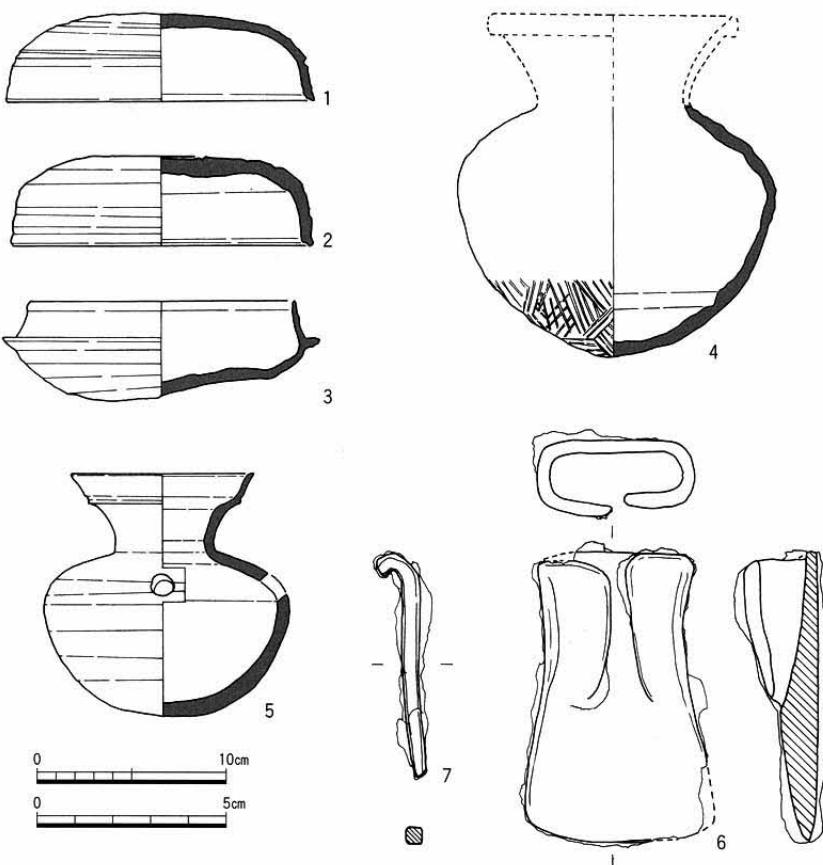


Fig. 64 第15号地点 出土遺物 (須恵器 1:4 鉄製品 1:2)

C 出土遺物 (Fig. 64, PL. 42-5・6)

1～4 に昭和39年度の土取りで出土したとされる須恵器を再掲載した。

採集品

1と2が口径の大きな杯蓋で、ともに径16.2cmを計る。天井部はやや扁平で、天井部と口縁部とを分ける稜線は失われ、凹線でその境を表現する。端面は内側に傾斜し、浅くくぼむ。

3が対応する蓋杯、口径14.0cmを計る。口縁端部は丸く收め、杯部底面はやや尖った感がある。4が壺で、口縁部は欠損している。胴部最大径をやや上に寄った位置にもち、16.8cmを計る。丸底で底部外面にタタキを明瞭に留める。

5が胴部が大きく張った鐸で、本調査で出土したものである。口径9.8cm、胴部最大径13.1cm、出土品高さ12.9cmを計る。胴部に比べて小さな二重口縁を有する。二重口縁屈曲部外面には1条の沈線をめぐらし、口縁端部はやや平らな面をもつ。口縁部および胴部ともに外面に波状文等の文様やカキメをもたない。胴部外面は丁寧なナデで整えられていて、胴部肩寄りに孔をあける。古墳時代の鐸には大型と小型の2種があり、前者は5世紀代に限られる形式である。本例は形態やその大きさから大型に属するものと考えられる。

6は鉄斧である。鍛造品で、上半部両側を折り返して袋穂部を形成している。長さ7.7cm、袋部幅4.2cmである。

7が鉄釘で上端を丸く折り返しただけで、錆化による変形が著しい。全長は6.0cm。断面は方形である。古墳にともなうものかどうか判断しかねる。

D 古墳の復元と年代

西側周溝の内側裾を墳端とし、丘陵の北と東の残存部いっぱいを墳丘範囲に含めた場合、径10mほどの円墳となる。墳丘南側の搅乱がひどいけれども、その搅乱が周溝の位置を踏襲したであろうとする見解が正しければ、この古墳に造り出しや前方部のような張り出し施設が付く余地はない。いっぽう、丘陵外側に面した斜面側は円墳というより方墳を思わせるほど、明らかに古墳築造後のカットが進行していることがわかる。したがって、本来、丘陵がどこまで延びていたかはもはや明らかにできないが、周溝がそこにもぐるほどの余地は当初からなかつたものと思われる。斜面側は削り出す程度の成形であったのだろう。なお、この程度の規模ならば段築をもたない円墳と考えて誤りない。葺石も本来なかったものと言える。

径 10 m の
円 墳

埋葬施設に関しては痕跡すら残っていなかったが、竪穴系の簡単な構造のものであったと思われる。木棺直葬などの石材を使用しない埋葬施設であったのだろう。鉄斧はその副葬品と見られるが、出土した鉄釘が棺に用いられていたかどうかは怪しい。製品としては古墳時代のものであっても良さそうだが、出土状況はむしろ混入の可能性を考えさせる。

ところで、今回出土した櫛についても厳密にいうと埋葬施設内に副葬されたものとは限らない。須恵器が埋葬施設内に一般的に副葬されるようになるのは、特別な場合を除くと、5世紀後半でも末に近くなつてからである。その場合でも竪穴系の埋葬施設の場合、棺内の空間に入れることはなく、棺の近くに置いて埋め戻す形をとることが多く、その場合、通常蓋杯や高杯が選ばれる。こうした一般的の傾向を考えると、櫛は埋葬施設内での使用に限られず、墳頂などの墳丘上面や裾など外表部分での使用も考えたほうがよいであろう。

この櫛の型式は陶邑のTK208～TK23型式に比定できると思われるが、昭和39年に採集された1～4の須恵器はMT15型式の特徴をそろって見せている。つまり、櫛とは年代差があると見られる。

第15号地点古墳は先に述べたように竪穴系の簡単な構造の埋葬施設を有していたと考えられるので、追葬による新旧型式の混在は想定したい。したがって、複数の埋葬施設があったか、あるいは時を隔ててから再び祭祀が執りおこなわれたことを考えざるをえないであろう。

5世紀後葉
の 築 造

後に述べる第13号地点古墳の時期も5世紀代で収まることからしても、この第15号地点古墳も採集された蓋杯よりも櫛の型式を重視して5世紀後葉に築造されたものと見たほうがよい。

3 第13号地点の調査

A 発掘調査の成果 (Fig. 65・66、PL. 40・41)

第15号地点の西250mほどのところに位置する。南から東北に延びる丘陵の末端に位置し、地形は北に向かって緩やかに下降する比較的平坦な地形であったが、北側はすぐに比高約1.5m下の水田耕作面に達する。発掘調査前には耕土中から大量の土器が採取されたため、中世末の遺構が存在することが予期されていた。

包含層遺物

はじめに設定した範囲では第2トレンチの土坑状のくぼみで平安時代初期の須恵器の蓋を検出した程度で、ほかに遺物をともなわない数個の小穴、ないし土坑を地山面でみつけたが、しっかりした顕著な遺構はなかった。

表土ならびに包含層から出土した遺物には、土師器小皿や焰烙の類が多く認められ、とくに南北方向の第1トレンチの北半に多かった。

円筒埴輪列

そこで北に11m拡張してはじめて円筒埴輪列2列を確認したのである。埴輪は地山と見られるバラス混じり暗褐色土上で検出されており、埴輪や須恵器片を含む暗灰褐色土ないし黄褐色砂質土が覆っている。2列の埴輪列の間隔は約1mで、その延長を確かめるために東に拡張し(第5トレンチ)、さらに、畦を残して東に約5mトレンチを拡張した。1972年度では埴輪の遺存度がこれら拡張部では悪かったので、1978年度にはそれらに重複してより東へ長く延びる第8トレンチを設けた。しかし、その範囲では埴輪の破片の集中状態からそこに埴輪が樹立されていたことをかろうじて推察できる程度で、計8本分がみつかっただけだった。

この1978年度の埴輪列確認のためのトレンチのさらに南にも平行して長さ10mほどの第7トレンチを設定したが、そこでは何ら遺構は確認できず、硬くしまった地山上面から埴輪片、須恵器片が他よりも多く出土しただけであった。

1978年度の南北トレンチ(第6トレンチ)では、埴輪列の南側2mの地点に1段落ちをみつけただけで、それより南には地形が現地表と平行するように緩やかに上っていくことが確認され、古墳に関連する遺構は何もみつけられなかった。いっぽう、トレンチ北端では1972年度に周溝と考えていた落ち込みが、表土下の砂層から切り込まれていることが判明し、周溝の認識が誤りであったことがわかった。

墳丘は不明

以上の結果、2列の埴輪列が古墳のどの場所にあたるのかまったく明らかにすることはできなかった。ただし、埴輪列は1972年度の検出分を評価すると、どちらかといえば埴輪列の北側に中心をもつ円墳の裾をめぐる埴輪列と見ることが可能である。そうすると、現状の水田面から考えて、古墳は完全に削平されていることが知られた。

また、円筒埴輪が2列近接して並ぶこと自体珍しいといわざるをえない。背後に山が迫ってくるような急な斜面地に築かれるような場合、違う段のテラスに並ぶ円筒埴輪列が、背面側ではほとんど同じ高さに接近してくるということもありえるが、本遺跡の場合はそういう状況は復元しがたい。

そこで考えられるのが、2列の間を通路として使うような場合である。しかし、1972年度検

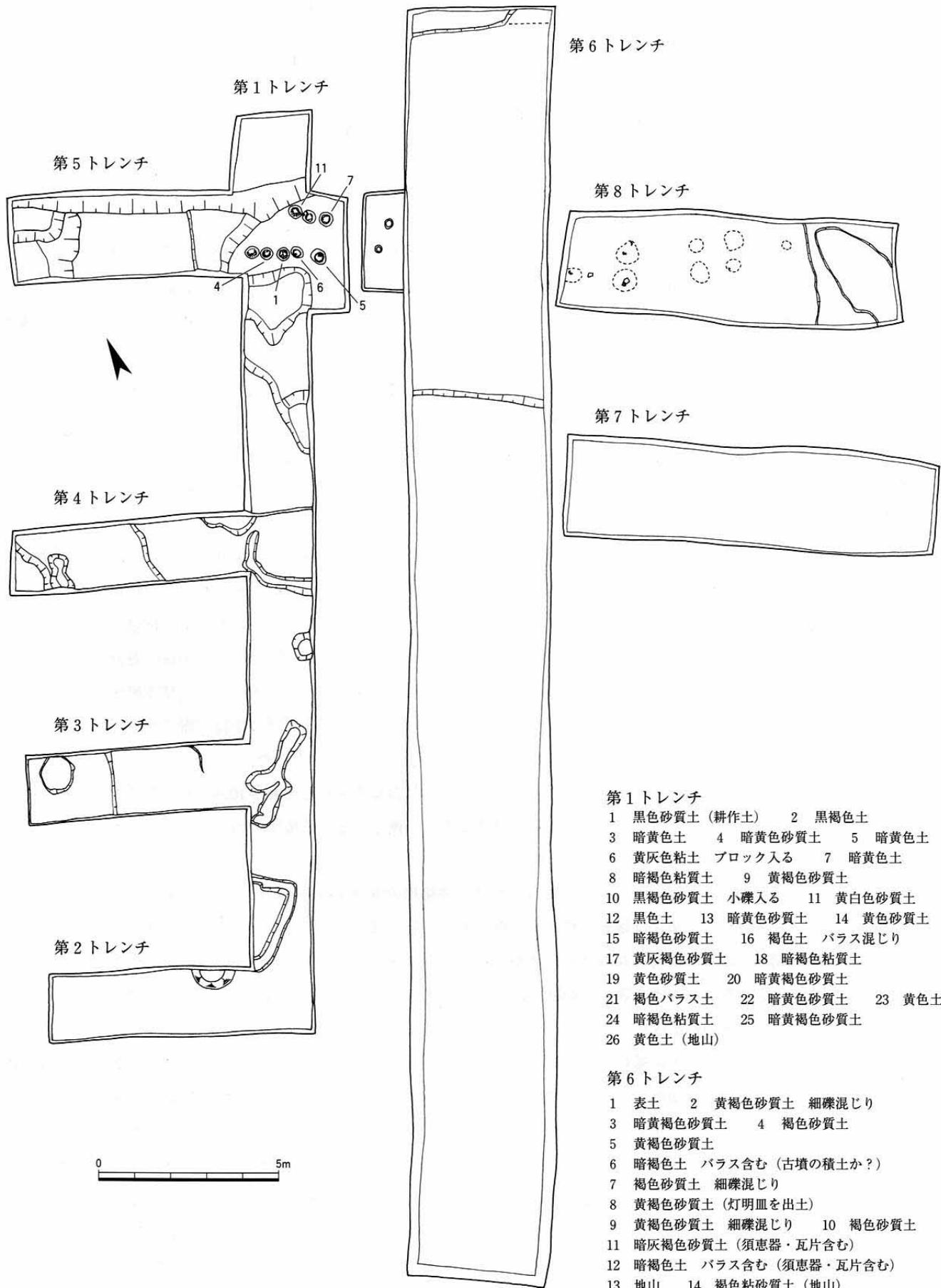


Fig. 65 第13号地点 遺構平面図 1:150

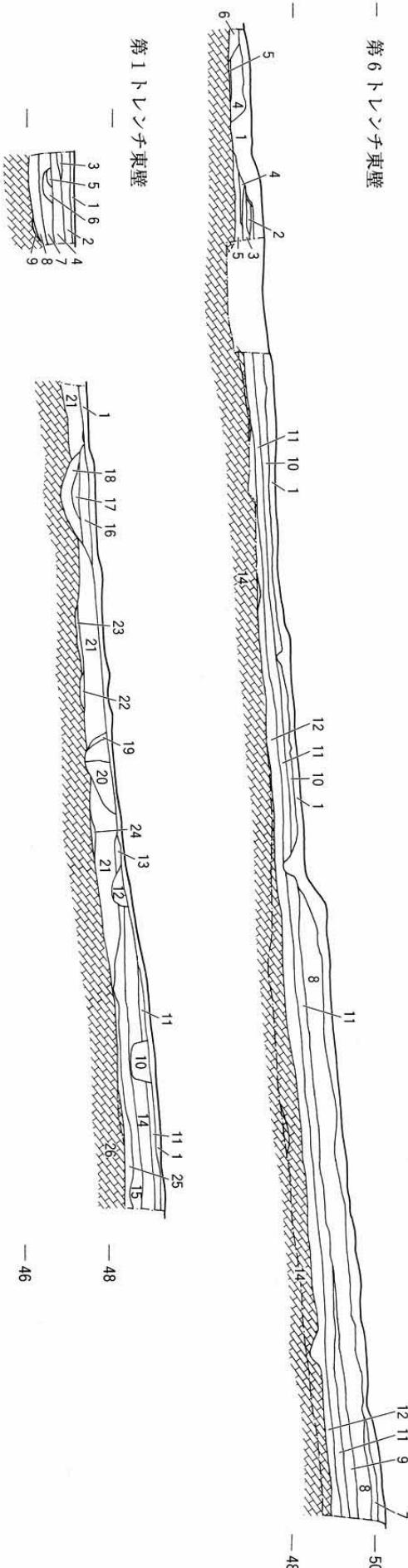


Fig. 66 第13号地点 南北トレンチ断面図 1:150

出範囲で見ると、1mにも満たない幅しかないことがわかる。回りに十分な余地があるにもかかわらず、このように狭い通路を用意するのも解せないだろう。

そこで、2列をまったく平行と見ずに、1972年度調査区の残存部分を重視して、北側の円筒埴輪列を墳丘裾を回る埴輪列とし、南側の列はそれとは異なる目的で樹立されたとみなせないだろうか。たとえば、造り出しのような施設の区画であった場合を考えることができるであろう。これ以上の予察は遺跡の残存状況からすれば意味をもたない。

B 出土遺物 (Fig. 67, PL. 42)

本報告では古墳時代の遺構を取り上げているのでここでは埴輪について報告する。

出土した埴輪はそのほとんどが円筒埴輪である。この中で完形に図上復元したものは1点だけであった。これをもとに各部の特徴をまとめると、第1段目がやや上開きでそこからしばらくまっすぐ上方へ伸びた後、最上段の第5段目は大きく外へ開く形態となっている。ちなみに1は復元全高45.6cm、口縁径29.1cm、底径16.2cmである。

突帶は低い台形の断面を呈し、突帶の間隔は心心で8~9cmと狭い。透かしは、第2段目、第3段目、第4段目にそれぞれ上下で直交するように2個ずつ円形のものを大きくあける。

調整は外面がタテハケメ主体で、最上段でも斜めに傾かない丁寧なものとなっている。ただし、中には9のようにB種ヨコハケメを回すものもわずかではあるが確認できる。内面調整はほとんどがナデによっており、最上段の裏側のみ横方向のハケメを丁寧に施している。

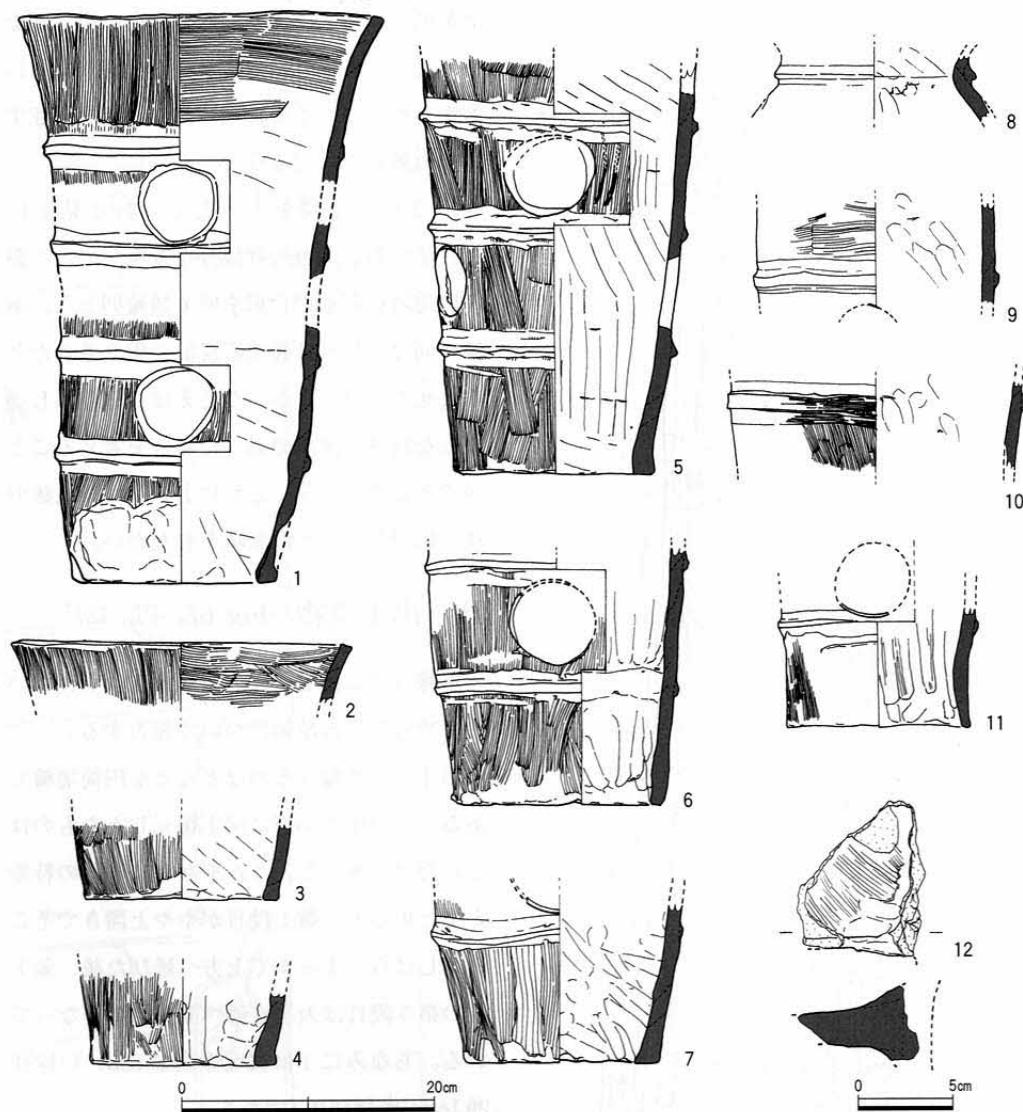


Fig. 67 第13号地点 出土埴輪 (円筒1:6 形象1:4)

確認できる基底部には縦方向のハケメが施されたままになっているものが大半であるが、11に示したもののように第1段を板状の工具を外面に当てて整えている個体がわずかに存在している。11は径が他に比べて小さく、14.7cmである。ハケメの特徴は5世紀末の年代を示す。

形象埴輪 8が朝顔形埴輪の肩部から頸部にかけての破片で、断面が三角形に近い突帯を回している。また、12は形象埴輪の一部である。円筒部から垂直に張り出す板状の破片であるが、表裏にはナナメハケメが施されているだけで、文様は認められない。板状部最下端が残っているが、そこがちょうど円筒部に回されていた突帯の位置にあたることが剥離の状態からわかる。形状から盾形埴輪ないし盾持ち人物の一部と考えられよう。

以上の各種埴輪は全体的に赤黒い橙褐色を呈していて、焼成は比較的良好である。黒斑をもつものはない。1の第1段目はおそらく窯詰めの際に火がよく回らずに剥落したのではなく、むしろ強い火力ではじけたような感じである。剥落後残った面までよく焼けている。また、1点だけではあるが、灰色で須恵質に焼け上がっている円筒埴輪の破片も存在する。